宿根草秋の手入れ

中原忠夫

秋の庭はダリヤ、グラジオラスや一年生草花の多彩な色で埋もれている事でありましょう。この美しさを唯秋だけでなく、春からずつと花で庭一面を埋めてみたいと、お考えになつた事はありませんか。春早くから開く花はクロッカス(花さふらん)、水仙、チューリップ等の球根類で、これ等を秋のうちに植え込んで置くのは勿論、宿根草を取入れる事に依つて、殆ど連続的に花を見る事が出来ます。宿根草の多くは種蒔、あるいは株分後数年間そのままで毎年花を咲かせる事が出来ます。そして開花期も種類に依つて早く咲くものから、又花期の長いもの迄あります。花が終つても夫々変つた特長を持つた葉が繁つて、チューリップ、水仙等の様に花後のみにくい姿をさらす事もありません。花期や種類をえらんで妙みに配された庭の美しさはまた格別で、兎角春先の雪融け以来荒れ勝ちな庭にあつて、光彩を放ち落着きをあたえてくれます。

宿根草の繁殖は大体実生に依つて行われておりますが、また大抵の種類は株分けに依つても殖やす事が出来ます。本道のように秋が短くて冬の寒い処では秋蒔はむずかしく、多く春行わねばなりません。しかし八月始め迄に蒔くと、冬越するものもあります。

花の終つた宿根草は大抵秋口になると、既に翌春萌芽する芽をもつているものです。無茶な取扱いさえしなければ、この時期に植替えや株分け等を行つても翌年の花には影響が少いものです。むしろ宿根だからといつて、同じ場所に植込んだままにして置くより、基肥をたつぷり施して植替えする事が大切で、この際株が大きくなりすぎているものは株分けしてやる等の手入れが、美しい花を咲かせる基本になるものです。

次に庭園用宿根草の種類と秋の手入れについて説明致しましよう。

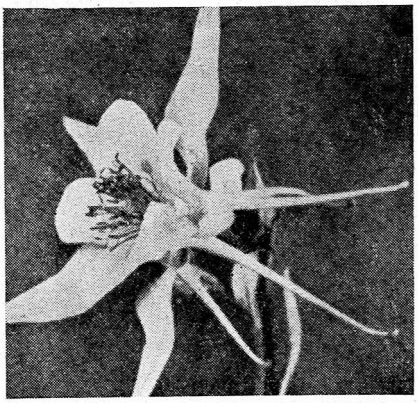
◇矮性の宿根草

(花壇の縁取り、毛せん花壇用)

○モス・フロックス、花芝(フロックス・スブラータ、セタナリヤ) 草丈二〜三寸、細い鮮緑の茎葉が地を這つて、その先に無数の小さなピンク、白、紫がかつた淡紅の花をつけ、毛せんを敷きつめたように一面に地を覆う美しさは、何ともいいようがありません。花期は五〜六月、乾燥、強日光に強く、夏むれないように注意さえすれば、到つて丈夫で繁殖は挿木、株分けで行います。七〜八月、地際を這う茎から発根して来るので、これを秋早めに切取つて植付けるのも良く、また春先新芽の出た頃発根している枝を分けて植えても良い。

○デージー(ひなぎく) ときしらずともいわれ、一般に親しまれている花で、花壇のふちとりになくてはならない二年生の草花ですが、花が終つた七月始め頃、稍しめり気があつて日光の直射のひどくない半日蔭に芽分けして育てますと、宿根草と同じく毎年咲かせる事が出来ます。デージーは花壇に春植しても良いが、大輪のモンストローザ種などは、九月始めに基肥を充分施して植込みますと見事な花を咲かせる事が出来ます。

○ツニカ(はりなでしこ) 草丈一尺位で鮮緑の細い茎が密生して可憐な白、淡桃の花を六月頃から開き始めます。開花盛期を過ぎる頃刈取りますと、盛夏の候に再び開花し始め、花壇の縁取りとしても、花容からうける清々しさは一年生のかすみ草の比ではありません。何といつても花期の長い事と丈夫な点は、他に較べるものの無い位です。春蒔よりむしろ八月始めに蒔く方が良く、芽生した二〜三分の大きさの苗でも結構越冬し、早春から開花します。



西洋おだまき(アクイレジア)

○桃色かすみそう(ジプソヒラ・レペンスローゼア) 宿根白花かすみそうと同じ大きさ位の淡桃の花を匍匐した枝に無数につけ、モスフロックス以上に美しく、春播しても一年で二尺位の大株となります。枝は這つたままかなり伸びますが、中途から根を下ろさないので、思うような形に枝を整える事が出来ます。根はゴボー根で、さ程深く入らないから播種後二年位で秋に植替し肥培するようにした方が良い花をつけます。これも花が終つた後に刈取りますと、再び開花し始めて秋遅く迄花を見る事が出来ます。

○西洋さくらそう 露地栽培して早春開花する種類で最も多く見られるものは、プリムラ・ブルガーリス(プリムローズ)プ・デンティキュラータ(かささぎさくらそう)プ・ポリアンサ及びベリス等で、早春三〜四寸の花梗を出して、白、紅、黄、桃の単色または混色の可憐な花をながく咲かせ、特に色彩の鮮麗なためによく眼につきます。夏の暑さに弱るので、どちらかというと半日蔭で乾燥しない場所を選んで植えることが大切です。実生は却々むずかしいものですが、秋の株分けは容易に行う事が出来ます。株分けは九月中下旬、株の基部の分岐点を二芽位づつつけて分ければ良く、葉も根も二〜三寸位に切りつめて植込むと良い。

◇中間植に適する宿根草

○シャスターデージー 至つて丈夫で一般向の花で、最近はマルコニーという重ねの

厚い八重種も出来たようですが、早咲種、輪の極く大きいアラスカ、半八重の大輪ダイナーデージー、稍よじれ瓣の半八重フロラデールデージー等が一般的です。種子によつても容易にふやすことが出来ますが、八重のものは八重の程度、葉、茎の形が色々と変つて出て来るので、株分けで良いものをふやした方が良いでしよう。株分けは春、秋いつ行つても良いものです。

○鬼けし（オリエンタルポッピー） 一重ですが真紅の大輪の花は人目につき、一種変つた葉姿も捨てがたいものです。株分けは思わしくないようですが、植替えは可能です。九月末頃迄に丁寧に堀り取つて根を植え易いように切りそろえて植えると、翌春から変りなく花を見る事が出来ます。

○西洋おだまき（アクイレジア） ロングスパード系の尾長おだまきといつて、距の長いものに多くの品種があつて色合も多く、前に多くの品種を試作しました時、ロンギシマ（鮮黄）カッパークイン（濃銅紅色）スノークイン（純白色）コエルレア（濃青）等が印象強く残つて居ります。最近はこれ等のハイブリットがあり、色合も種々あつて美しいものがあります。尚、距の短い種類にブルガーリスというものがあります。草丈は何れも大体二尺位で、花の頸が弱い欠点はありますが、花壇植としては見事です。六月から七月にかけて開花する丈夫な草花ですが、兎角湿地や瘠地では二～三年もすると株が弱つて来るので、植替えなり株分けしてやる事が大切です。秋、早目に堀上げますと、既に株の基部に芽がついているから二～三個つけて分け、植込むようにします。

○宿根かすみそう（ジプソヒラ、パニクラータ） 七月始めから小雪を想わせる小花を無数に群開して、夏、花壇の王女とも言えましよう。実生によつて容易に殖やす事が出来ますが、八重咲種では根接も行われて居ります。併し株分けに依つても増やすことが出来ます。秋には既に翌春の芽が出来ておりますので、叉状に出ている根を切離して根も五～六寸に切りつめて植込みます。

○宿根ひえんそう（デルヒニューム） 淡青色とコバルト色の四尺～七尺に達する花穂は、六月から七月にかけての北国の花壇の王といつても良い位、雄大な容姿を誇つています。移植は余り好みませんが、若株のうちは傷みは少ないようです。時期としては春早くか秋早目に行う事が大切です。大体宿根ひえんそうは夏冷涼で雨の少ない処でないと良く育ちません。府県暖地では株の越夏がむずかしいようで、本道でも年によつて株腐れが出て減る事があります。繁殖は多く実生に依りますが、発芽が悪いものですから、五月初旬冷床蒔にして、本葉二～三枚時、露地移植して肥培して秋早めに植付けるようにします。種類によつては挿木も行えますが、株分けは概して思わしくないようです。土は左程選ばないが有機質を多く施した方が生育が良いようです。

○桃葉ききょう（カンパヌラ・パーシキホリア） つりがねそうの一種ですが、桃の葉のように細長い葉をつけ二～三尺位の草丈で、桔梗より小型の花を穂状につけ、白、青色があります。非常に株が大きくなり易く二～三年そのままにして置くと貧弱な花穂しか出なくなりますから、株分けをする必要があります。時期は秋の初めに三～四本にして植付けます。

○ジューム（だいこんそう） 葉がだいこんに似ているのでだいこんそうといわれているが、バラ科に属するもので、赤、黄の二種があつて楚々とした容姿は何ともいえない風情に富んでいます。切花、花壇植にも適します。実生も出来ますが種子（痩果）には毛が生えていて発芽しにくく、秋早めに株分けしますと容易にふやすことが出来ます。

その他 花穂の雄大を誇る宿根昇藤（ルピナス・ラッセルス）、古くから馴じまれている桔梗（プラテコドン）、宿根矢車草（これには桃色矢車草、デールバーターとジキタリスのような広葉をもつあざみ矢車、マクロセファラとがある）、古くから一般的なしやくやく等は太い根が数本出て頸部に多くの芽をつけているので、数芽ずつつけて根を割つて切口に木灰をぬつて植付けるようにします。特にしやくやくは九月中旬をはずして行いますと思わしくありません。早過ぎれば株の充実が足りませんし、遅過ぎると新根が出始めていたのを傷つけるためで、春先とか秋遅くにこれ等の作業を行いますと、先ず二～三年は満足な花は見られない場合があります。

宿根フロックス（益花）、赤花除虫菊（ピレスラム・レッド）、ペントステモン（つりがねやなぎ）、ノコギリソウ（アキレア）等は根が増えますので株を割つて植付けます。

◇高性で背景植に適する宿根草

○ノコギリソウ（フイリペンジュラ、きばなのこぎりそう） 四尺位伸び三～四寸の鮮黄色の頭状花をつけ、切花としても良いものです。これは株分けによつて容易にふやす事が出来ます。

○せいようふよう 非常に丈夫で六～七尺にも伸び、白、桃、赤の色彩があり、八月末から九月一杯咲き続けます。稍木質化した太い根を分けて増やす事も出来ますが、株分けは春の芽立ちが遅いので春の方が良いでしよう。

以上主として球根を除いた宿根草の繁殖法や手入れについて述べましたが、宿根草は兎角植えたまま数年おくのでヒメスイバ等宿根性の雑草がはびこりますので、秋に思いきつて株の近く迄深く打起してそれ等の雑草の根を除く事も大切な手入れです。

宿根草の肥料 一般に草花は花を咲かせるものなので窒素に偏重したやり方はまずく、大体各要素とも同じ位施すのが良いといわれています。そして花の種類にも依りますが、花が咲き終つてから翌春の芽の発育のための養分の蓄積や株の発育が行われますので、かなり長い期間養分を吸収するものです。従つて速効性のものより、徐々に効く有機質のものを多く施した方が良いのです。馬糞より牛糞の方が草花に良いといわれていますのも、この分解の速度に依るものでしよう。そして堆厩肥は勿論油粕類の有機質肥料や、人糞尿は秋のうちに施した方が良いと思います。化学肥料は植替えの場合基肥として必要ですが、それも時期がおそくなつた場合は翌春四～五月に施しても良く、花の終つた後のうすい液肥（人糞をうすめても良い）は効果の多いものです。

（雪印種苗・上野幌育種場）